



# ハーレム ヴァルキリー

*Harem  
Valkyrie*

小説 竹内けん 挿絵 高瀬むう

立ち読み版

ドモス

クロチルダ

セレスト

金剛壁

バザン

インフェルミナ

リア

●カリバーン

●アーリア

●ベニーシェ

ネフティス

●マドラ

●バーミア

●ベアドリス

ヴィーヴル

●バタフライ

ヴァスラ

●レナス

雲山朝

ーニ

オレアンダー

ラルフイント

●マリオバール

ティヴァン

●デミアン

山麓朝

リュミネー川

●ラーニングロード

●ゴットリーブ

サブリーナ

●プロヴァンス

オニール

エトルリア

●ロードナイト

シルバーナ

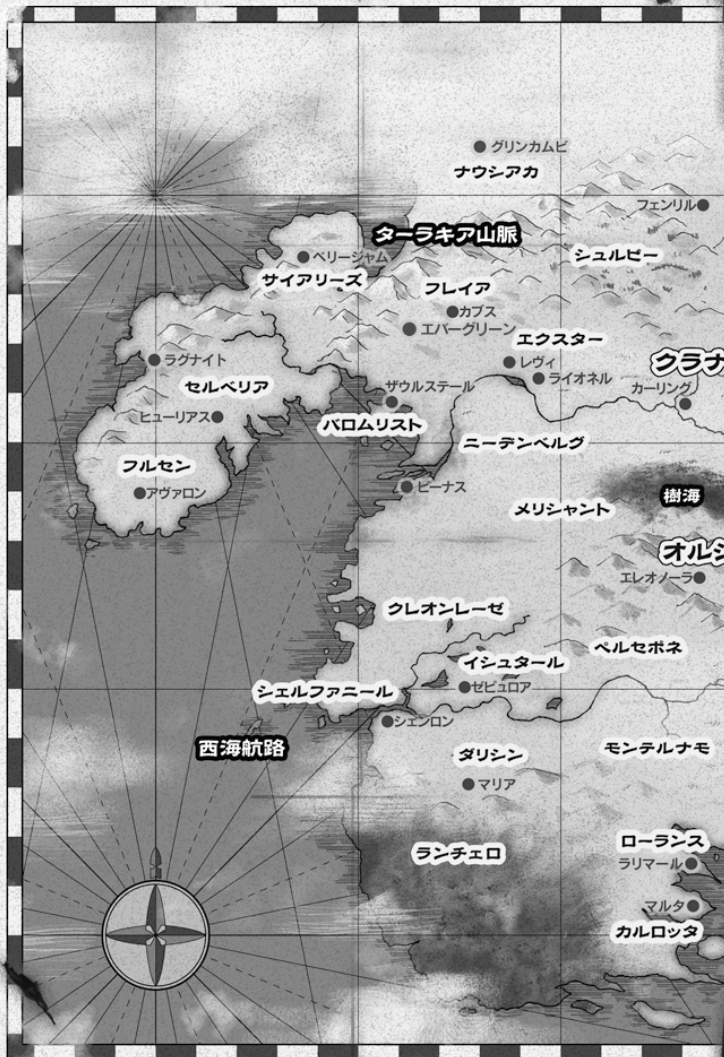
翡翠海

●バルザック

●ブラキア

トルフィヤ

ガルシヤール





## 登場人物紹介

Characters



### レイチェル

フレイア王国で百人隊長を務める女騎士。



### オクタヴィア

ナウシアカ王国の王女。剣を魔法で操る「飛翔剣」の使い手。

### アーサー

オクタヴィアの身の回りの世話をする小姓となった少年。





### ベラ

オクタヴィアの騎士団で  
副将を務める女傑。



### シェスタ

アーサーとともに育った義姉で、  
騎士団の参謀役。



### マルローゼ

オクタヴィアの側近で、  
若き魔法の天才。

第一章	小姓のお仕事
第二章	舐め犬調教
第三章	暇潰し
第四章	捕虜
第五章	お仕置き
第六章	死のルーレット



ベラの主張に、オクタヴィアとシェスタは酔を飲んだような表情になる。

「ということ、オクタヴィア。こつちに来て、あんたをオナペットにした不届き者へのお仕置きをしてあげなさいよ」

「そ、そうだな」

ベラの口車に乗せられて、オクタヴィアが湯船から出てきた。

透けるような白い肌に、大きな乳房、ピンクの乳首、くびれた腹部に、金色の繊毛でできた陰毛。

その圧倒的な美貌を前に、アーサーは鼻血を出しそうになる。

「マルローゼ、あんたもおちんちん見たことない口でしょ？ いい機会だから、こつちに來なさい。いろいろ教えてあげるわ」

「うん」

主君が動いたことでマルローゼもまた、先輩の呼び出しに応じた。

マルローゼは、アーサーとほぼ同じ歳。年齢的に一番若いだけあって、スレンダーというより、ズンドウに近いような気もするが、女性の裸というだけで、アーサーには十分に刺激的である。

（うわ、おっぱいだ。どこ見てもおっぱいだ）

頭上にベラの乳房。左にはシェスタの乳房。足下にはマルローゼの乳房。右にはオクタヴィアがある。

視界の大半が肌色だ。

同じ肌色でも、オクタヴィアの肌は透き通るようであり、シエスタは乳白色、ベラは健康的に日焼けし、マルローゼは青白い、と微妙に違う。

おっぱいの大きさも違う。一番大きいのが、シエスタ、次いでオクタヴィア、ベラ、マルローゼという順番である。

お仕置きされている地獄であるが、同時に天国気分という複雑な心境だ。

「ほらほら、二人ともよく見なさい。これが噂のおちんちんってやつだよ。まだまだお子様サイズだけだね」

「これが男の子の生殖器……？」

マルローゼは興味深いと言いたげに顔を近づける。

「そ、可愛いものだろ」

「いや、悪魔に呪われているみたい」

マルローゼの不快感な表情に、ベラは笑う。

「はじめはちょっとびっくりするかもしれないけど、すぐに可愛くて仕方なくなるわよ。次は匂い嗅いでみな」

先輩に促されたマルローゼは、恐る恐る逸物の先端に鼻を近づけてクンクンと匂いを嗅ぐ。そして、顔をしかめる。

「臭い」

「うふふ、やつぱりね。ねえ、参謀殿さ。大事な弟を風呂に入れたとき、ちゃんと身体を洗ってあげないとダメだよ」

「洗っているわよ。そこはおしつこをするとところなんだから臭くて当然でしょ」

シエスタは心外なと言いたげに応じる。

「おちんちん洗ってないでしょ？」

「そりゃ、姉弟といえど、節度はあるわよ」

ベラは首を横に振るう。

「なっていないな。男の子はここが一番大事なのに。オクタヴィア、せつかくだから皮を剥いちやいましょう」

「え、皮ってこれから？」

集団心理というやつだろうか。真面目な顔したオクタヴィアは、戸惑いながらも手を伸ばし、包皮を引っ張る。

「そうそうそれ。包茎おちんちんを前にしたら、剥くのが淑女の嗜たしなみってやつよ」

「淑女っておまえが言うか？」

「いいからいいから、主君としての威厳を見せるためにも、オクタヴィアが剥いてあげたら、この子、泣いて歡ぶわよ」

ベラに促されたオクタヴィアは、戸惑いながらも、アーサーに確認を取る。

「剥いて欲しいのか？」



「そ、それは……オクタヴィア様になら……♪」

包皮を剥く、という行為は自分で少しだけしたことがある。

そのときは死ぬほど痛かった。

それゆえに正直怖かったが、オクタヴィアに逸物を触ってもらえる、という誘惑には代えがたいものがある。

「よし、ならば剥いてやろう」

女としての好奇心を抑えきれなかったらしいオクタヴィアは両手を伸ばすと、たつぷりと余った包皮を<sup>つま</sup>抓む。

「ごくり」

側で見守るマルローゼが、生唾を飲んだ。

ぐいっとオクタヴィアは包皮を開いた。

「ひぎっ！」

予想以上の激痛が襲った。それをシエスタが咎める。

「こら、アーサー、マクスウェル家の男子たるものが、何みっともない悲鳴を上げている。せつかく、オクタヴィア様が剥いてくださっているのよ」

「で、でも、義姉さん、これ凄く痛い……」

「言い訳など男子のすることではありません」

シエスタはぴしやりと反論を封じた。

完全に泣きが入ってしまったっている側近を見て、オクタヴィアはいささか困惑した表情を浮かべる。

「そんなに痛いのなら、無理強いをするつもりはないが」

「いえ、こいつにとつていい思い出になると思います。よろしくお願いします」

「そ、そうか……わかった」

信頼している参謀に促されたオクタヴィアは戸惑いながらも、包皮を一気に剥けるだけ剥き下ろしてしまった。

「ひい、ひぎあああああ!!!」

初剥きされた媚粘膜に、空気が触れる。それだけで年若い少年には強すぎる刺激だった。ブシャ!

水風船でも爆発したかのように、剥き上げられた皮の中から大量の白濁液が一気に噴き出した。

ドクン! ドクン! ドクン!

噴水のように噴き出した白濁液が、オクタヴィアとマルローゼの顔から胸元にかかる。それをオクタヴィアは掬<sup>すく</sup>い取る。

「このヌチャヌチャしたのは、精液か」

「わたしにこんな臭いものかけるだなんて……呪うわ」  
マルローゼは半泣きになっている。



「いや、その……ごめんなさい」

アーサーもまた半泣き、いや、マジ泣きになりながら平謝りするしかない。

逆にアーサーを背後から抱き締めているベラは嬉しそうに笑いながら、鼻で深呼吸する。

「うわ、凄い臭い。濃いわ。部屋中が精液の匂いでいっぱいになっちゃった」

風呂場は密閉した空間であり、精液の匂いが充満する。

「それにしても、参謀殿は男を知らないくせに、意外と冷静なんだね」

ベラの指摘に、シエスタは左手で胸元を隠し、右手で股間を押さえながら、頬を染め、視線を逸らしながら告白する。

「そりゃ、その子、わたしの前で、そうやって何回も暴発させているし、仕方ないでしょ。男の子の生理現象なんだから」

「え、義姉さん、気付いて……いたの」

「気付かないはずないでしょ。こんなに匂いするんだから」  
ばれてないつもりだったアーサーはがっくりと脱力する。

はじめは偶然だったとはいえ、シエスタのほうも意図的に弟を挑発し、暴発させるのがひそかなストレス解消法だったのだ。

「まったく、参謀殿がそこまで変態だったとは知らなかったわ。それにしても、さすがに一回射精しただけじゃ小さくならないのね」

ベラは足の裏に挟んだいまだに硬い逸物を弄ぶ。

「短小、包茎、早漏。そして、無限の性欲。これぞ好事家の女にとっては至宝と称えられる、美少年のダメダメちんちんってやつなのね」

ジュルつと涎が止まらんと聞いたげに、ペラは口元を拭った。  
それを見たシエスタが窘める。

「だ、ダメよ。この子は我が家の大事な跡取り息子なのよ。あなたの玩具になんかさせないわ」

「ケチ。それにしても汚いおちんちんよね。恥垢だらけじゃない。参謀殿が、ちゃんと洗ってあげないからいけないのよ」

「ぐっ、たしかにこれはだらしがない。オクタヴィア様に見せるのに、これはいわ。まったく、わたしがついてないとほんとダメな子なんだから」

シエスタは石鹸を手に取り泡立てると、亀頭部を握り締めた。

「あ、義姉さん、そんなところを握られたら」

「我慢なさい。あなたはマクスウェル家の跡取り息子なのよ。こんな垢だらけの身で、主君の側に侍るなど恥を知りなさい」

敬愛する姉に、剥き出しの亀頭部を無理やり洗われる。

綺麗なお姉様たちの裸に囲まれて、初剥きされた亀頭部を捏ね回されたのだ。  
アーサーの逸物は狂ったように射精を繰り返した。

「あ、義姉さん、らめええ、そんな、ひいひい」

「ああ、ありがとうございます」

膳を素直に受け取ったレイチェルは、寝台の上に胡坐をかき、躊躇いもせず木のスプーンでスープを掻き込む。

上半身は身体にぴったりとした薄手の鎧だが、下半身は太腿を大胆に露出させた装いである。

そのため、胡坐をかくと、まるで黒いハイレグショーツが見えているかのような錯覚に陥る。

（まあ、見せることを意識した服装なんだろうけどな）

そう頭でわかっていても、いろいろと意識してしまう。

（この人って、なんか凄いセクシーだよな。露出という意味だけなら、ベラ様のほうが凄いけど、レイチェルさんのほうが断然エロく感じるのはなぜだろう？）

股間ばかり見ているのも失礼な気がしたので、食事をするレイチェルの顔を見る。

（しかし、まさかあの面頬の女騎士がこんな美人なお姉さんだったとはなあ、クールでセクシー。この顔が戦場で傷付くのはもったいない、という理由で周りの人が付けさせていたのかな）

することもなく食事をしている美人お姉さんの顔を見ていると、いろいろとあらぬ妄想が生まれてくる。

（エッチとか凄そうだよなあ。並の男じゃ相手にならないというか、あつという間に絞り



取られて鼻で笑われそうというか。おっぱいでかいよなあ、鎧の上からでもわかる巨乳だ。それでいて腰のくびれ、腰とかガンガン使ってきそう。オマ○コの締まりもハンパなさそうだ)

昨晚、オクタヴィアと初体験したばかりのせいか、いろいろと生々しい妄想が膨らんでしまう。

瞬く間に食事を終えたレイチエルは、不意に少年を見咎めた。

「どうかしたか？」

「い、いや、毒殺とか気にしないですね」

あらぬ妄想に取りつかれていたアーサーは、我に返って、適当なことを口走ってしまった。

出された食事を綺麗さっぱりたいらげたレイチエルは、ナプキンで口元を拭いながら悠然と応じる。

「あたりまえだ。いまさらそんなことを気にしてなんになる？ それよりも、あたしが食事をする分だけ、敵の食糧を減らせる。これがあたしのいまできる唯一の攻撃だからな」

「あはは、さすがは闘将ですね」

捕虜になっても、いささかも卑屈にならないレイチエルの姿に、アーサーは好感を持った。

(騎士の鑑だな。捕虜になんかなりたくないけど、もしなるようなことになったら、彼女

のように堂々と振る舞いたいものだ」

アーサーが捕えたといっても、偶然の産物である。

もし、互いに同じ条件でやりあったなら、とても勝てる気がしない。

不運にして捕虜になってしまった彼女に、できるだけのことをしたいと感じたアーサーは、食器を下げる前に質問する。

「何か不自由はありませんか？」

寝台の上に胡坐をかいたままレイチェルは、殺風景な室内を見渡しながら思案する。

「そうだね。強いて言えば、暇で死にそうだ」

「それは大変だ。ぼくでよろしければ話し相手ぐらいは付き合いますよ」

「ふん」

レイチェルは推し量るようにしてアーサーを見る。

「そうだね。退屈凌ぎに、少し遊んでいかないかい？」

「遊びですか？ トランプゲームでもお待ちしましょうか？ それともチェスのようなものをお望みで」

その程度の差し入れをするのは問題ないだろう。アーサーは請け負った。

レイチェルは失笑する。

「何的外れなことを言っているんだい。男と女の遊びといたら、一つしかないじゃないか？」

「え、なんですか？」

戸惑うアーサーの顔を見上げながら、レイチェルは膝の上に右腕で顎杖をつきながら意味ありげに笑う。

「セックス」

「ぶっ！」

予想はしていた。いや、期待していた答えではあるのだが、アーサーは驚愕した。

「ふ、ふざけないでください」

からかわれているのだと解釈したアーサーは、血相を変えて叫ぶ。

レイチェルのほうは、セックスぐらいなんでもない、と言いたげに両手で伸びをしながら答える。

「坊やはあたしに勝ったんだ。戦場で捕えた女を犯すというのは、男の特権ってやつだろ？」

「ぼくはそんなことしません！」

捕虜を陵辱するなど、騎士としてあるまじき行為だ。少なくともアーサーはそう思っている。

「あたしが欲しいって言っているんだから、いいじゃない」

そう嘯いたレイチェルは、いきなり薄手の鎧を外しにかかった。

「あたしってさ、キミみたい子。好きなのよ」

「からかわないでください」

「からかってないわよ。あたしがキミに欲情しているって証拠を見せればいいのかしら？」  
そう言うっているうちに鎧は外され、さらに下着の類もあっさりと、いや、アーサーを挑発するように脱いでいく。

「……っ!! な、なに脱いでいるんですか!!」

慌てて視線を逸らそうとしたが、美しい女性の裸体には、少年の視線を吸い寄せる磁力がある。いくら逸らそうとしても、チラリチラリと見てしまう。

（でか、おっぱいデカ。スレンダーだとばかり思っていたのに、おっぱいあんなに大きいんだ）

スレンダーな肢体とは裏腹に、爆乳を誇るお姉様は、少年の視線を楽しみつつ濃紫の髪を掻き上げる。

「単なる暇つぶしだ。難しく考えることはない。お互い後腐れなく、気持ちよく楽しもうじゃないか。いわばオナニーだよ」

「で、でも……」

心は動いているのだが、煮えきらない少年の態度に、裸となったお姉さんは、何か悟るところがあった、と言いたげな表情を浮かべる。

「もしかして、あの取り澄ました女に遠慮しているかしら？」

「取り澄ました女？」

「聞いているわよ。あんた、あの女の色だつて話じゃない」

意味ありげに笑ったレイチェルは小指を立ててみせる。

「っ」

自軍はおろか、敵軍にまで届いている噂に、アーサーは鼻白んだ。

実際にオクタヴィアのことか脳裏にちらついていないと言えはウソになる。

（昨日初体験させてもらったばかりなのに、浮気というのは、オクタヴィア様に対する重大な裏切りだ）

と理性は告げている。

そして、理性的な判断としては、もう食事を運ぶという目的は達したのだし、とつとと部屋を出るべきだ、ということとはわかっている。

しかし、そんな頭ではわかつていても、身体が動かない。

それだけ目の前のお姉様が魅力的すぎた。

動けない少年を前に、レイチェルは自らの乳房を両手で持ち上げてみる。

「このおっぱいでは、物足りないかい？」

「……」

物足りないはずがない。むしろ、むしろつきたい衝動を止めるのに、全身全霊を使っている。

そんな少年の葛藤を見抜いているかのように、レイチェルは笑う。

「あの偉そうな女じゃ、坊やにああしろ、こうしろって煩く命じるだけで、坊やにまったく奉仕してくれないんじゃないか？」

「そんなことは……」

実際、指示が煩わしいと思ったことが、ないわけではない。

「あたしなら、いっぱい奉仕するわよ。玉だって舐めてあげるしね。ああ、パイズリってやってもらったことあるかしら？」

「パイズリ……」

「そう、パイズリ。このおっぱいの間におちんちんを入れて、シコシコしてあげるわよ」淫らに笑ったレイチェルは自らの両の乳房を左右から押し潰し、深い谷間を作ってみせた。

ゴクリ。

思わず生唾を飲んでしまった。

（あのおっぱいにおちんちんを入れてみたい）

パイズリは男のロマンの一つだろう。残念ながらオクタヴィアはやってくれたことがなかった。

夢膨らむ少年の前に、魔乳を誇るお姉様は歩み寄ってきた。

「うふふ、ここでやる分には誰にもばれないわよ。もちろん、坊やの飼主にもね」妖しく微笑んだレイチェルは、アーサーの頭を抱くと、唇を重ねてきた。



「う、うむ、ふむ……」

頭を左右に振りながら、情熱的に唇を擦りあわせる。

さらに舌が唇を舐め回し、口内に押し入ってきた。

有無を言わず舌を搦め捕られ、吸い上げられる。

そのキステクニックだけでも圧倒されるのに、レイチエルはさらにアーサーの手を取って自らの乳房を握らせた。

（すげえ、バインバインだ）

オクタヴィアの実乳、シエスタの爆乳に勝るとも劣らぬ魔乳であった。

（手が吸いついて離れない。うお、揉みだしたら止まらない。なんだこれ、魔法にでもかかっているみたいだ）

レイチエルの手が離れても、アーサーの手は乳房から離れることはなかった。

それどころから濃厚な接吻を楽しみながら、夢中になってモミモミと乳房を揉み続けた。

（あ、乳首が硬くなってきた！）

少年にとって綺麗なお姉様の乳房ほどに、魅惑的な玩具はない。ほとんど無意識のうちに、コリコリの乳首を弄り回している。

やがてレイチエルは絡まる舌を解き、唇を離した。

「ふう、……それとも、あたしみたいな淫乱な女は嫌いかしら？」

プリンプリンとアーサーは盛大に首を横に振るってしまった。

（美人で淫乱なお姉さんが嫌いな男はいません）

脳裏にそんなフレーズが浮かんだが、口にする勇氣はなかった。

そんな声無き声が聞こえたと言いたげなレイチエルは、妖しく耳元で囁いた。

「な〜に、キミはしなくていい。あたしが一方的に全部やってあげるよ」

「……」

アーサーは答えられなかった。この場合、沈黙というのは肯定と同じだ。

「うふふ♪」

意味ありげに笑ったレイチエルは、その場に屈み込むと、少年のズボンの中から逸物を引っぱり出す。

いまだ半萎えだ。

「あら、可愛い。これがあの氣取った姫將軍様のお氣に入りの宝物ってわけね」

ニヤリと笑ったレイチエルは、半萎えの逸物を紫色の紅の引かれた唇に咥えた。

「う」

逸物は男の急所である。そんなところを、昨日まで敵。いや、いまだに敵であり、ただ捕虜となって近くにいるだけの女性に預けるのは怖い。

まして、レイチエルは物凄い美人ではあるが、同時にも物凄く怖そうな女性である。前歯でがつつり噛み切れそうさだ。

そんな恐怖の想像にかられながらも、逃げることもできない。

期待と不安で身を固くしている少年を上目遣いに見上げつつ、レイチエルは逸物をしゃぶった。

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ」

温かい唾液に浸された逸物は、瞬く間に隆起していく。

「うふふ」

逸物を口いっぱい頬張ったレイチエルは妖しく笑った。

一旦逸物から口を離すお姉様は、右手の人差し指で尿道口を捕えて捏ね回しながら囁く。「さすがはあたしを負かせた男のおちんちんね。素敵だわ」

そう言われると悪い気はしない。

仮性包茎気味の逸物は勃起しても、鰓の部分に少し皮が残ってしまっている。左手で肉幹を握ったレイチエルは、無言で包皮を根元まで剥き下ろし、自ら股の間に入って上向きになり、肉袋を舐め始めた。

シコシコシコシコ。

左手で肉棒を扱き上げながら、二つの睾丸を舐める。

男の最大の急所が、美しくも恐ろしいお姉様の玩具にされているのだ。

ゾクゾクするような快感が、少年の身を襲う。

「うん、うん、うん……」

鼻を鳴らしながら、レイチエルの舌は裏筋を舐め上げてきて、亀頭部を舐め回し、裏の

壁を左右に捏ね回す。

まさに男のツボを知り尽くした練達の技だ。

それでいて、レイチエルは決して射精はさせない。意図的に快感だけを与えて、射精に至らないように調整している。

「あう、あう……」

アーサーは思わず、情けない官能の声を上げてしまった。

（やっぱり、見た目通り経験豊富なんだ。オクタヴィア様より断然うまい）

熟練の技を思わせる女の手管に、アーサーは追い詰められた。そして、いよいよ我慢が聞かないと思ったとき、レイチエルは逸物から離れた。

「っ!？」

驚くアーサーの前で、レイチエルは両手でそれぞれ両の乳房を持ち上げてみせた。そして、自らの乳首に交互に舐めてみせる。

「さてと、次はお待ちかね。これで挟んであげるよ♪」

「ぜ、ぜひ!？」

「うふふ、やつと素直になったわね」

鼻息も荒く頷いてしまう少年を見上げて、満足げに頷いたレイチエルは、蹲踞ぞんぎよの姿勢で上体を伸ばし、いきり立つ逸物を胸の谷間に挟んだ。

（お、すげえ、バインバインのおっぱいにおちんちんが包まれたっ!？）

柔らかい肉感に包まれる感触が気持ちいいのはもちろんだが、自分の逸物が女性の象徴に包まれている、という視覚効果によって、歡びが倍化する。

「あらあら、こんなに先走りの液を垂らしちゃって♪」

卑猥に笑ったレイチエルは、大きく口を開くと赤い舌を伸ばして、亀頭部をペロリペロリと舐め始めた。

「はう」

あまりの気持ちよさに、アーサーは情けない呻き声とともに震える。

「好きなときに出していいわよ。時間はいくらでもあるんだし、何発だって付き合うわ」  
クールな眼差しで見上げてきながら、レイチエルは舌を動かし、男を包み込んだ魔乳を上下させる。

「でも、このままじゃ……」

「遠慮はいらないわ。あたしの顔にぶっかけなさい」

クールで怖いほどの美人顔。そこに自分の精液をかける。それはなんとも背德的なことに感じた。

しかし、それゆえにやってみたい衝動が抑えがたく湧き上がる。

「そ、それじゃ……いきますよ」

「ええ、ぶっかけて♪」

少年が限界に達したことを察したレイチエルは、その射精を促すべくますます乳房の上

下運動を激しくし、さらに口先に咥えて、尿道口をちゅつと吸った。

それが呼び水となった。

少年の欲望は一気に噴き出す。

ドビュッ！

レイチェルの唾液によって濡れた睾丸から噴き出した液体が、肉筒を通って、レイチェルの顔に飛翔する。

ドッビュユユ!!!

猛々しくも美しい女勇将たるレイチェルの顔が、みるみるうちに白く染まっていく。

(うわ……)

きつい美貌である。性格もきつそうだ。おそらく彼女の部下たちは、上司のことを鬼のように恐れていたに違いない。

そんな怖いお姉さんの顔が、見るも無残に自分の吐き出した精液で汚されたのだ。

その惨状を見下ろして、アーサーは申し訳ない気分とは裏腹に、とてつもない爽快感を覚えた。

(こんな綺麗な誇り高い女性の顔に、ぼくの精液をかけちゃったよ。オクタヴィア様には絶対できないことだよな)

満足感に浸っているアーサーを見上げて、精液塗れのお姉様は、ニヤリと笑う。

「いっぱい出したわね。こういうチンポ好きよ♪」





「女として勝負よ」

恐る恐る質問するアーサーに、オクタヴィアは荒々しく銀砂色のマントを脱ぎ捨てた。

「わたしのほうが女として上と認めたのなら、わたしの部下になりなさい。もし貴様が勝ったら、その子をくれてあげるわ。名門マクスウェル家の正式な花嫁になれるよう、わたしが仲人してあげるわ」

「なるほど、ユルマンお嬢様があたしに張りあおうっていうのかい。面白い、受けて立つてあげる」

レイチエルもまた、黒き鎧を脱ぎだした。

みるみるうちに、アーサーの目の前で、オクタヴィアの白銀の重鎧とレイチエルの漆黒の軽鎧が取り払われた。

鎧の下にあったインナーを脱ぐと、白い下着姿と黒い下着姿があらわになる。

まずはオクタヴィアがブラジャーを取り、それに合わせてレイチエルもブラジャーを取った。

ぷるんと合計四つの巨大な乳房が現れる。

大きさは若干、レイチエルが勝る。レイチエルの乳房は釣鐘型。オクタヴィアの乳房は砲弾型である。

オクタヴィアの乳首はピンク色で、レイチエルの乳首は赤い。

（こうやって見ると違いがよくわかるなあ）

思わず見比べてしまっているアーサーを他所に、次いでショーツが脱がれる。

オクタヴィアの股間では、金色の繊毛がふわっと立毛を起こし、レイチェルの股間では、濃紫の陰毛が巻き上がる。

オクタヴィアは自らの乳房を誇示しようと、両手を持ち上げてみせた。

「厚手の鎧を着ていたから、勘違いしていたかもしれないけど、わたし、脱いでも凄い女なのよ」

「たしかにね。でも、いくら顔が綺麗で、スタイルよくても、オマ○コ緩いつていうのは、女として致命的よね」

さも同情するといった表情を作ったレイチェルもまた、両腕を上げてみせる。

二人の美女は自らの乳房を凶器であるかのように突き出してみせた。

美乳対魔乳。

どちらもスレンダーなのに乳房は大きく、女らしい凹凸に恵まれている。手足が長くて、肩幅がある。見事な逆三角ボディ。単に筋肉と脂肪のバランスがいいというだけではなく、生まれ持った骨格がすでにエロい。彫刻家が発狂して喜びそうな肉体美だ。

二人は互いの乳首を、さながら剣に見立てて斬りあう。レイチェルが質問する。

「で、オマ○コの具合のよさなんてどうやって測るつもりだい？」

「決まっているわ。アーサーに二人のオマ○コに交互に入れさせる。そして、射精したオマ○コがいいオマ○コってことよ」

「なるほど、わかりやすいわ」

憎々しげなオクタヴィアの答えを、レイチエルはあっさりと受け入れた。

二人の烈女の勝負方法を聞いてアーサーは安堵する。

（そ、それなら、オクタヴィア様のオマ○コの中で射精すればいいんだよな。よかった。簡単だ）

反則をするようでレイチエルには申し訳ない気もするが、いまのアーサーに選択の余地などない。

（それに再び、オクタヴィア様のオマ○コに入れさせてもらえるなんて夢のようだ）

オクタヴィアの身体で童貞を食べていただき、同時に処女を頂戴した。

アーサーにとっては、至福の体験である。その翌日に、レイチエルと浮気したばかりに、捨てられてしまったのだ。

（でも、あのレイチエルさんの激しい腰使い。あれは得がたい体験だった）

最愛の女性の裸体があるというのに、人生を誤らせた妖女の裸体もあるのだ。そんな光景の前に、アーサーの思考は錯乱する。

悶々とする少年の顔を見て、レイチエルは苦笑する。

「うふふ、相変わらずわかりやすい子ね」

「でも、スケベに正直なところが可愛い……」

「まあ、その気持ちは少しわかるわ」

アーサーの顔を見て、レイチエルとオクタヴィアは妙に意気投合したようである。

（え？ どういうこと……）

キョトンとするアーサーを他所に、裸のお姉様二人は並んで寝台に乗った。

アーサーから見て左手にレイチエル、右手にオクタヴィア。二人は向かいあわせになり、それぞれ上に美脚を上げてみせた。

しかも、それぞれの手で自ら陰唇を開いてみせたのだ。

「さあ、いらつしやい。絶倫坊や」

「今日頑張ったご褒美として、今夜だけ色小姓に復帰させてあげるわ」

ぽっかり開いた女壺を前に、アーサーの理性は吹っ飛ぶ。

「ありがとうございます」

歓喜したアーサーは犬であつたら、尻尾を盛大に振り回していただろう。

大急ぎで服を脱ぎ捨てたアーサーは、ブルンと逸物をはね上げると、わき目も振らずに美女たちの待つ寝台へと飛び込んだ。

「きゃっ」

女たちの嬌声を聞きながら、アーサーは二人の片足ずつを肩にかけて、陰唇にむしゃぶりつく。

ジュルジュルジュル……。

顔を左右に振るいつつ、左のダークローズの媚肉と、右のホワイトローズの媚肉を交互

に舐める。

（見た目は違っても、味はそんなに変わらないんだよなあ）

若干、レイチエルの贅肉が厚めであり、味も濃い気がする。

オクタヴィアの淫核は包茎であり、レイチエルの陰核は仮性包茎気味だ。

「あん、もう、器用ね」

呆れるレイチエルに、オクタヴィアが答える。

「そりゃ、わたしの色小姓だったんだからね。わたしのオマ○コだったら、一日中だって平気で舐めているわよ、こいつ」

「うわっ、高潔そうな顔しながら、身近な美少年にそんなことさせていたわけか。まったくナウシアカ王国の次期女王様が聞いて呆れるわ」

そんな軽口を叩きあっている女たちの陰唇を一通り味わったアーサーは、右の人差し指と中指をオクタヴィアの膣孔に入れて掻き混ぜ、左手の人差し指と中指をレイチエルの膣孔に入れて掻き混ぜる。

「あん、そこ、そこ気持ちいい、あん」

「ひい、そこ、あん、上手い、そうそいい」

女たちは目の前に同性がいることで、ライバル意識を刺激されるのだろう。男と一対一でやるときよりも、いい声で鳴いてくれる。

アーサーは膣孔を振るようにして、穿りながら、淫核を剥き上げて、中身を交互に舐め

弾く。

女たちはあつという間に理性を失い、室内に嬌声の二重奏が響き渡る。

「あん、もう、もう、もう、イっちゃう」

「イク、イク、イク——ッ」

一人が絶頂したことで、連鎖したらしい。オクタヴィアとレイチエルはほとんど同時に絶頂し、キュンキュンと二本の指を締めてくれた。

二人を絶頂したことに満足したアーサーは、左肩にレイチエル、右肩にオクタヴィアの足をかけたまま上体を起こし、顔を上げると口元を拭った。そして、いきり立つ逸物を構えて宣言した。

「それじゃ、そろそろ入れますよ」

「はあはあはあ、ええ、いいわよ。どちらのオマ○コが上かきつちり見極めなさい」

「せいぜい、頑張りな」

オクタヴィアとレイチエルの許可をもらったところで、アーサーは逸物をぶち込んだ。  
「入れさせていただきます」

まずはオクタヴィア。

ズブリ！

「あん」

アーサーの右肩に乗ったオクタヴィアの白い左足がビクンと痙攣する。

（あう、オクタヴィア様のオマ○コ、久しぶりで、すげえ気持ちいい♪）

温かく柔らかい贅肉が肉棒の隅々にまで吸いついてきて、逸物が蕩けるようだ。

本来ならこのまま思う存分に、腰を振り回したいところだが、あいにくともう一人いる。もったいない、と思いながら泣く泣く逸物を引っこ抜くと、左隣の膣孔にぶち込む。

ズブズブ！

「ああ♪」

アーサーの左肩に乗ったレイチェルの逞しい右足がビクリと痙攣する。

（おお、この吸いつきすげえ、チンポ吸い取られそう♪）

ぎゅつと締めつけて逸物をくびり取られそうな膣孔だ。

どっちがいい悪いではなく、どっちも気持ちいい。

（こんなの優劣なんて絶対に決められないよ。こうなったら、二人ともイかせまくって、有耶無耶<sup>うやむや</sup>にしてしまうのが一番いいよな）

二人とも気位の高いお姉様たちだが、肉体のほうはエロエロで感度抜群であることを、アーサーは承知していた。

（どんなに綺麗でカッコイイお姉さんだって、一皮剥けば牝なんだから、なんとかなるはずだ♪）

もはや女に慣れていない純粹な少年ではない。それどころか、仲間の女騎士たちに肉バイブ扱いされて、薄汚れてしまった魔少年だ。





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!